

山城國
大内山

嵐山

て其名を失ふを慎むべし、白山は唯壹峯にて、根張も大に、殊に雪四時ありて、白玉を削れるがごとく、見るより目覺る心地す、又山の姿のよきは、鳥海山、月山、岩城山、岩鷲山、彦山、海門嶽なり、皆甚富士に似て、一峯秀出畫がけるがごとし、又景色無雙なるは、薩摩の櫻島山也、蒼海の真中に只一ツ離れて獨立し、最峻峻なるに、日光映すれば、山の色紫に見え、絶頂より白雲を蒸がごとく、煙り常に立登る、たとへば青疊の上に、香爐を置たるがごとし、大抵海内の名山是等に留るべし、其山内の奇絶は、又別に書あり、今此所には仰望む所を論ずるのみ、

〔書言字考節用集〕乾一大内山アホウチヤ和城十四、十月、勅授從五位下、封之、

〔國花萬葉記〕二下大内山 洛西仁和寺の上の山也、此つゞきに玉山とて有、

〔山城名勝志〕八下大内山 花鳥餘情云、大内山は仁和寺の名所也、

花鳥餘情云、承平三四六、若狹國所獻之雉、放於大内山云々、

〔倭訓彙〕前編四十五おほうち 大内をいふ、略、中大うち山も同じ、源氏に、諸共に大内山は出つれどとよめり、左大將の直廬、中の重にありといへり、兼輔のうたに、

白雲の九重にたつ嶺なれば大内山といふにぞありける、又仁和寺の山をもいへり、亭子院のおはしませし所也、よて御室ともいふなり、衣笠内府、

遙かなる都のいぬわが宿は大内山のふもとなりけり

〔新勅撰和歌集〕十九亭子院大内山におはしましける時勅使にて參て侍りけるに、麓より雲の

立ちのぼりけるを見て、よみ侍りける、
中納言兼輔

しら雲の九重にたつ峯なれば大内山といふにぞありける

〔書言字考節用集〕二嵐山アラシヤマ本字荒野、字、城

〔國花萬葉記〕二下嵐山 西山松尾の北、法輪寺の後の山也、此山に難瀨ナセの瀧有、又郷西又八郎と云